



Title	外国人の学習と生活をつなぐネットワーク活動の意義：母親たちの協同的な活動「料理交流会」の事例分析から [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	本間, 淳子
Citation	北海道大学. 博士(教育学) 甲第12498号
Issue Date	2016-12-26
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/64725">http://hdl.handle.net/2115/64725</a>
Rights(URL)	<a href="http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Junko_Homma_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

## 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（教育学）

氏名：本間 淳子

## 学位論文名

外国人の学習と生活をつなぐネットワーク活動の意義  
－母親たちの協同的な活動「料理交流会」の事例分析から－

## 1. 本論文の課題

人びとが国境を越え移動を続ける中で、言語的・文化的な差異のある他者との協同は必要度を高めている。しかし、従来は当事者が変化すべき（＝日本語を学習すべき）であることが暗黙のうちに共有されていた。また、日本語学習の現場では、対象を「日本語学習が必要な人／日本語力が欠けている人」と設定し、「未習事項＝できないこと」の特定・導入が教師の役割の重要な部分を占めてきた。一方で、当事者の生活状況や「できること」についてはあまり問われてこなかった。だが、生活背景の捨象は主体の把握を困難にする。また、学習の場での排除的な状況も取り残されてしまう。加えて、当事者が日本語を必要としても、その状況ゆえに教室で学べない場合も考えられる。

増加を続ける外国人住民の中でも帯同されてくる家族は明確な来日目的を持たず、日本語学習歴もない場合が多い。筆者が身近に接した外国人の母親たちは、家事・育児の情報を必要としながらも、乳幼児を抱えているために所与の学習機関・機会から遠ざけられてしまうと訴えた。日本語がバリア化する背後には、「当事者が日本語を学習すれば、問題は起こらない」という暗黙の前提があり、「日本語ができないから、問題が起こる」という言説と表裏一体である。当事者に加えて家族や周囲の人びとも同調すると、言語はバリア化する。このように問題の要因を全て言語に帰してしまう構造を言語的バリアと名づける。

本論文の課題は、言語的バリアが解体され、言語が新たな目的／対象達成のツールとして位置づき、また、当初の教室的な支援の場が居場所となって、当事者が主体性を回復するプロセスを「自己化 (appropriation)」として明らかにすることである。

## 2. 本論文の方法

本論文では、外国人の母親たちが創り出した協同的な活動「料理交流会」を対象事例とした。料理交流会は、外国人の母親と家族、単身の留学生、地域の日本人（大学生・大学院生・社会人）が相互に料理を紹介・試食する活動で、公共の調理施設等を会場として約3年間に22回行われ、18か国の100人あまりが参加した。調査対象に深く、継続的に関わり、生成プロセスをとらえるため、定量的な方法ではなく、筆者自身も当事者として参加し、参与観察と面接を行った。

## 3. 各章の概要

各章の概要は以下のとおりである。

第一章では、外国人住民の支援実践に関する先行研究を検討し、「1 支援の場の生成」「2 支援の場における同質の他者たちのネットワーク生成」「3 同質の他者に異質の他者を加えたネットワーク拡大」という三つのフェーズを抽出した。その前段階は「0 見えない状況」とした。また日本人・日本語・日本社会も変わるべきという近年の提言を、仮説的にフェーズ4「ネットワーク内外の相互変容」とした。以上の五つのフェーズの内実と転換の契機を具体的な事例において検討することとした。

第二章では、帯同されて来日した外国人の母親 Amさんと Gmさんを調査協力者として、フェーズ0、

フェーズ1、フェーズ2の実状と転換の契機を明らかにした。二人はそれぞれ留学生家族・国際結婚家庭の来日直後の状況を、言語的バリアによる孤立状態（フェーズ0）として語った。筆者は Am さんの自宅で日本語学習支援を行ったが、支援・被支援関係によって Am さんは否定的な自己認識を持ち、支援は休止された。生活上の疎外と学習上の疎外とがマイナスのスパイラルを形成しているのがフェーズ1である。

休止期間に顕在化した生活上のニーズに対応して、留学生・家族・地域在住の日本人と共に「一緒に日本料理を作る会」が行われた。公的な助成金を申請し、「料理交流会」と名付けられ、Am さん一家の帰国前に相互に母国料理を紹介する活動となった。活動は数週間に1度のペースで継続されたが、参加者が次々と友人を招くようになり、「私たち」の居場所が作られ、多言語が使用される中で日本語はツールの一つに位置づいた。Gm さんも参加し、同時に、生活上のニーズに即した漢字学習が始められたが、従前の支援・被支援関係を再生しないように筆者は十分に Gm さんと話し合った。Gm さんは母国料理を紹介し、同僚を招待するなどして参加を続け、「私たち」の場＝居場所と日本語＝ツールについて、見通しを語るようになっていった。フェーズ2の料理交流会の第Ⅰ期（生成期）では、言語的バリアが逆転してツールとして、また、支援の場が居場所として、同時に絡まり合うようにして自己化されていく過程であることが確認された。

続いて Am さん・Gm さんと筆者らの関係性について「フォーマル／インフォーマルな場面」と「否定的／肯定的な感情」の二軸上に整理した。両者が「肯定的な感情」を持つようになった転換点は、「インフォーマルな場面」と「フォーマルな場面」で並行して起こっていた。

第三章では、料理交流会のリピーターたちを調査協力者として、フェーズ2からフェーズ3への転換の詳細と、フェーズ4への方向性を検討した。フェーズ3に対応するのは料理交流会の第Ⅱ期（開放期）である。外国人の母親たちは、古参・新参に関わらず、「出席」「料理紹介」「友人招待」という軌跡をたどっており、アクセスの開放性が示された。また、リピーターの属性のシフトからつながりには質的な転換が起こっていたことが明らかになった。リピーターの外国人の属性は第Ⅰ期の「外国人の母親」に、第Ⅱ期と第Ⅲ期では「留学生」が加わっていった。リピーターの日本人の属性は、第Ⅰ期の「ケアワーク経験者」に、第Ⅱ期では「ケアワーク／越境経験者」が加わっていた。そして、第Ⅲ期はすべて「越境経験者」になっていた。

リピーターへのインタビューからは、料理交流会の第Ⅲ期（再生期）の特徴が描きだされた。リピーターたちの「私たち」意識には、第Ⅰ期の「今、この場にいる仲間」、第Ⅱ期の「今、この場にはいないが、私／たちの仲間」に、「今後、出会うであろう仲間」が加えられていた。同時に、活動の対象には、第Ⅰ期の「料理」、第Ⅱ期の「仲間に会う」に、「つながりを維持・再生する」ことが加えられていた。

以上から、相互に変容することを前提とした集合的な主体形成のプロセスがフェーズ4への方向性を示していると考えられる。

#### 4. 結論

料理交流会の参加者である「私たち」は、「私たち」にとって居心地の良い場を、「私たち」によって作りだすことに自覚的になっていった。それは、自分自身も変わりながら、「私たち」が生成／再生しているコミュニティそのものの変化を受け入れることでもある。活動の価値も所与のものとは異なる「私たち」の尺度で評価され、生活上の疎外と学習上の疎外のスパイラルが断ち切られることになったと言えよう。

第二言語の「自己化（appropriation）」とは、来日当初に排除的な状況にあっても、仲間（同質の他者）と共に生活上のニーズを満たす協同的な活動の場を創り出すこと、異質の他者も含めたつながりを形成して、ツールと活動に自信を回復していくこと、活動の場を新たな他者にも開放して、自由に見通しを語ることだと言えよう。

このように、協同的な活動を通じた第二言語の学びは、来日後の排除的な状況を再転倒し、主体を再構成しうるものであると考えられる。